絲櫻春蝶奇縁

後編

貳

へ遠13
1579
7

特
へ 13
1579
7

絲櫻春蝶奇縁卷之七

東都　曲亭馬琴編述

第十段

雛蝶丸單身賊寨に到る
小絲児再生虎穴を出

帝國圖書館藏

半時ばかり平八山魅伍平太を説激まづ綱五郎を結果て日来の怨を復し。
まして後は伍平太を殺さずして首級を扇谷殿へ献り。縛の便宜をもて一文字の
陣羽織を進ぜしるべとして隨ある賞賜を得て壮佼ホど長とうふ富と威と
両ながらつれよりものわるべりびと肚裏小較計る。謀計大ひに就て要ところ
綱五郎ぐ寨へ来ると呼しるべ小藤を拘てふく飲び伍平太を耳結て小賊ホを戒
厳合。山魅丸命を釋もせず。軍師臭て進ミ出る位隨て雙つゝ徒輩雛蝶丸綱五郎
親衡ら膂力ありて義狂ぐ剽姚を兼ねるべしの如紀藤者ら維令

単身で来るとても幸不幸を祭んと共に身方ふ魏員を多のべ小敵とて蔑ろにし。
夫大将を驕しめられを殺すべ必勝と二夕軍書先生の講釈を聴て張良子房
這奴こそ来るとも挑くーーーーを動さで憍慢ふ管待るべ実ふ知れてこそ
さるとて公の由断を窺ひ心魅大人を晴そとして盃を擲ぬ。そのとき伏兵一
度ふ起て共くと生掏らべ嚢の中なる物をとるよう易めるべ。と説示せば小賊ふハ
いのもさくん。伍平太ふとく感佩して盃をたゝ笑尼向後ふ知つくとこそ
草廬をゐんやつぐこの孔明を知らしでや。金襴で黒平ぶ計策ふたぶとなく。綱
五郎を生掏まるし。まづ祝ぎの酒礁せん腹を肥て膂力を増。拔羣なる働をせよ
といふ裏肴こそ弘て酒ハ好まう。絆されう。樽蓋も腰もとち拔。車坐ふ居られ
つ。彼張樊ぶ當飲ふ献つ酬つ酌ふ泥の如くふ酔臥る昏睡も翌の為なり
べ。さる程ふ綱五郎ハ伍平太ぶ懺悔の顔こそ出ひらぶも。入ふ物いいけ

られて一歩もこぬ俠者なんべ既ふ彼と羽豆を契りてもくべ。ふう級諾ひらぶ年来
滅ふある壮佼ふを芝崎道場へ召聚て件の話を告よけれバ。衆旨少て眉根を
ふを彼伍平太ハ支黨の小賊あまくあり。素ふ柔ふ仕う信をるるめふしも
わふざるふ大牙を慕ふとふハ研ー加舗故なして猛ふ遠く去んとふも又
こそ弘ぶーーふハ必大牙を彼ふへ誑ふのて撃ぶとんとふふこそ漫ふ彼処へ
赴きあづ生て再びやづがらけんをそるべくと玄級巻て禁るふぞ。綱五郎莞ふと
笑こつ且も又詭の謀とふたのてふこ且をまれう繋ふとても振れて弘ものどを。
伍平太ふ倆らまんその猛威をまんとふハけふりして里人ふハ夜を安く睡ふ
やこーつづこそ既ふ決せう。ふ盃の諫言ーのふるとふひどをする氣色なるけれバ巨六
幡丁とふ壮佼二人ふのふ共ふ班を出大哥やくーのぞるやんとふひ決めあづ仇を
防ぐ准倣併肝要なるん。今推量ふ。伍平太ぶ一隊ハ三十人ふふ

又此方ゐも。三四十人の壮佼を擇ぶ。こゝ亦死ぬるを赴きあり。といへども果ぞ綱五郎ハ。
孔と左右よりうち掉て管領よう免許ゐる。駿の里人を糾催し。伍平太等と
戰ふて切るゝ刃の罪をいふ。て脱れんこれも又うけ引がし。り虎穴を入ずんば
虎を後搏まとるふよりほしつ且軍身ゐて彼処へ赴き。竟ゐ命を隕ずとも山巷
と組で死ん殘るハ烏合狗黨の小輩。伍平太ゐ殺ずとも逐ずとも難敵ならぐ里ゐ
主ゐ。家ゐ父母ゐハ綱五郎ゐ刃を捨て里人の為。旅客の為ゐ蠱害を除んゐ。
庶幾ところ。運喝ゐバこゝ。そこの一生の別ゐるべ。酒盃をとりはゐ。
といそぐとゐぞ。巨六醫丁ハその勇敢ゐ感伏て。衆人と面をあわ。竟ゐ海ゐ
爭ひ練ゐ。酒肴を安排して命ゐ。ろ〳〵酌ゐ。その曛昏ゐ辭ゐ。て。おのく
宿所へ帰りぬ。却説綱五郎ハ旦角十兵衛ゐ件のゐ死ゐ。ゐめしゐバ陷ゐて禁ゐ
らゐゐのやとゐ。ひしゐバ。その夜不町へかゐりて。狹七ゐもいさゐ苦ゐ。綱ゐ刀乃

鞘力をあ。て徐ゐその用意ゐ。使げゐうち卧て。物ゐ。ハ。ゐ。ゐ。ゐ。
廬宅のゐのハ絶て。ゐ。ゐ。次の日巳の比ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
宿所を出ゐ。途ゐ。二瓢の酒を購ゐ且死尺八の笛ゐ指著て。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
悠〻ゐ。ゐ。ゐ。圓塚山へ赴きゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

圓塚の小賊ホ
腰輿よりて
龍蟠丸を
迎ふ
つるぢ五郎

善人と共に居て善人とあそぶものは善人なり。悪人と共に居て悪人と
遊ぶものは悪人なり。則善人なり。悪人と共に居て悪人と
遊ぶものは悪人なり。汝ホ既に先非を悔て遠く去んとのたまへども管領
より旧悪を免されさるよあらざれば盗賊の名は削られ難し。察白の使者と
汝ホが盗さうて貯へる腰輿ホを受て父母より受る身を穢さんや。先へ退てこれらの
よく沢伍平太に告さるべしよこの山樹木多くとへども菜生ずして高くこれ
山よりも低くなんよといひつゝ嘗引あげて。桐の下駄を穿ずに疾と走がごとくなれば。
小賊ホハ呆て果て半ハ先ざらて。伍平太に告さるべし半ハ綱五郎が背に跟て。
づゝよ腰輿を舁吹鼓の音を停て食後を下ろそ喘だけ。ゆゆしくべ伍平太ハ。五
十人の小賊をゆそ門外へ出迎。茶諾をたゞ〳〵して速に貴臨せる歓びこれにまさんと
ず。誘こるべへと恭〳〵後堂へぞ誘引ぬ。當下綱五郎ハ汝を呼つ。彼此をうるふ。
九木を舁て石を壁て。須代天井に棟裏包て。香蒲を編て席とせんど如こる

翠簾かけ〳〵して。綱度ゑども雅なるあり。又俗なるものあり。相馬内裏の二の
町めゝう。左右なる廊下ハ布の幔幕をうつて。内ハ人あまた籠そけうひ
まとおびしきハつれを聚ん爲ホこそ。と大〳〵猜〳〵ぐ〳〵うちうんさるのこ此も駆
ぐど。肩なる瓢をもろ〳〵。ずゆと坐て伍平太まうち対ひ齋さるまの酒ハ。
和主ハ餞別なり。既まのもいひつるぞ。ゆや山海の美味を陳列葛飾乃
青菊練馬の蕪蔔芝浦の雑魚鎌倉なる松魚ゆて郷食るとも。穢まるる
人ハ受ぞ。彩装をそのへて食連ず出ぬべ。里物盡如すで送んぞと兵管ホ
いそぶせハ。伍平太堂うちのこそ大哥何のとて性急なる。吾們既ず彩志を改
これハ共ず見潔白の人なるぞや。なるぞホ盗るゆ終りて大歌の口腹を穢をぐき
假蘇民の肩途なる送別の酒ハ所なり。りつぐ物を嫌ひなるぐ贈られる瓢を
ひゝんさんとて猶て小賊ホず盃盤をとり〳〵ぶ。酒を温。肴を添。壽詞を述。

山歌を唄ひ裏皆奥を催せば。綱五郎は些も擬議せずと巨盃を引受く。續
さゝぬふ三度傾け。山魅よ閃りと投げて。長身なる腰刀をぐんぬて星と引抜き。
野猪の肉の燒くるを刀尖よ貫ぬて。肴せんとそさゝ出せば。伍平太酒を弱も奥で。
この威勢よ呑まるゝべ。顔色土のごくふるゝて。時刻いるまで暗号ハ弱せず。黒平ハ
幕の陰よう。綽のまうを眺縁てゞと閃らくゝ。ども。其処へ出べきつゞ多るふ孫ハ。
ろひう移て潛まふ。ゆ肴生てさゝ拒くを。伍平太ハ尻目よりけそもゝねちりう
ちて黙然さう。時よ西の方ふあうて女子の哭ゝ頻ゆていとも長く咲ゝし
ゝべ。綱五郎耳を側ゞて。山魅を見かゝて渠ハそも何ぞと問へば。伍平太答ふ待
逐惑忽地色よ見ゝ現ろう弱ぬるゝりし某つやくさうゞとのふその言葉
いまゞ終ゝゞ。綱五郎ハ衝と居ゝて。伍平太ゞ領上を鷲の如くふ掻廻ゝ主人が
ちゝぬとるゝべ。山鬼変化るゞまあゝん。繍りう苦るあそゝん案内せゝゝひつも。

右ゆよ力を引搦て。卧る牛の起るゞ如く。足端そうて立あゞう。声をるやさへ
と赴きうる。その收勢。僅よ二三歩まる。小児を引搦るふ異るゝゞ。伍平太ハ質ふ
ゝうれて。項ゞも伸ゝ弱ゞ。鳩の豆を喙むゞく。又ハ九十の爺婆ゞ遺せゝりの紙
索るゞく。腰を折ゆ膝を嘗ゝゝゝゝ。瞻仰るゝとゝるゝゞ。阿容ゝとして引ゝてゝ来。
この為体よ小賊ホハ。吐嗟とゞう立騒ゞ。黒平ハ幕の蔭よう。眼を睜う。舌を
吐き。笑れ果てゝんとゞをゝふゞ。勅よゆを出さゞ。伍平太よ過失せんと陪ゝ仗
兵ホハ。ゝまゝくふゝく。孫よ。僅よ八九人の小賊。そうゝ尻よ跟ゝう當下綱
五郎ハ郡をゝう繞う。臥房と奇ゝ紀知よ到りて。紙障を開放さゝ孫俎折り
繞ゝる。行貧子よ停立て。左右ゝを見ゝるふ。擔前ふ高紀松の枝よ。女子ゝいく
指ゝ下ゝう。年紀ハ十六七ゆあゝんゞゝん。長るる黒髪をゝう乱。背ゆふ絡れて
地の上五六尺放よゝんゞ。漸くふ索ゝひ入りて。苦痛いゞゝもあゞゞ。容北の艶妖さ。

萎る花の匂ひ残り。樹上より垂るく白藤の数丈とるふ彷彿さう。綱五郎ハ元と
見て驚くも嘆息。衣の腋より引著る。伍平太をうかゝうて。目今いさく驚哭
まゝ。ハよ彼有る女子ゝ。ゆくても汝ハ誰ぞといふや。五臓六腑を照らすとい
殘のて見るふあゝ称どゝ見ハ汝ぶ肚裏を。ためらく知りぬ。雖言ば力士を怪
幕ふ隠して。整とゝんと謀るとも。数多足ゝね鼠の輩。ハの世ゝうの地獄除
敵挫ゝいと易し。汝いづ見の知よう。この女子を掠奪る。明ゝ我ハこれをいふ
ぞや。と臂を攘し。貧子の端へ頻を揺著て責ゝでも。伍平太失声を出とのを。
果敢くゝ考ハ意を覆せど。綱五郎ハ高ふ呵とゝ笑ひ後方ふ立され
小賊ふを。佞とゝ見ゝて声を奇ぞ。汝ふこの木偶人主の尻のこまのふぞ。
るゝて女子の索を釋てゝ扶ゝ。扶ゝ。ゝさる二人ハ索の本をとゝて徐ふ繰ゝせ
二人ハ女子を楚と抱てゝをとるゝハ扶ゝ。と残るゝ指揮して遠し

拐を向上それるゝ女子驚くべゝ。みづゝゝゝを思ふせよ。われ必汝を救ん。
且く苦痛を忍べく。とゝハ向ふ小賊ふハ。獲て女子を扶ゝ。貧子の上ふ
舁居ゝハ。綱五郎ハ小賊ふをひとゝく小罵り使ゝて。件の女子を奪ゝ。茅
刷を与へ湯を飲しさまぐふして勤るふぞ。ゝゝ。ゝ見ゝ。拝ゝ。
知こ骨さゝ疼くゝて立もるゝ。流る涙を拭ひつ。綱五郎をみ拝べ。ぱくくと
見ハ。ゝて。ゝ見けゝゝるゝ。ふ。ゝ。ゝ。ゝ

住さふ下総のくにとて良人よ扶抜はらつ。夕こえて来る二の山の麓まで追捕の武士ふ。特と〻とろこ〻れ。良人の存亡定らるゝ。ぐ。つ〻ハ矢庭よ囚れて。さの外へ引ぱ出すつ。て立るゝ男が圓るゝ目を細て臥房の間人よるれとい〻その為体盗賊の大将単とおぼしきふ。ゝ定る夫るゝともいつでこの外をゝろんべ。特よつ〻ハそ良人あり。一席ふ外ぐも。稼ゝを落忍び隙をゝ見ぬ脱ぬ去良人の先途をゝ定めて。黄泉の客とゝるゝ。つ〻も其外て死ぬ。とゝろ。めゝ〻情〻ゝね命も要時をゝ。れて。つ〻ふ悔つぐ。この〻月のさゝ。けゝハ〻ゝ煩ゝと。辛よ假托十四五首。遣責ハ僅よ脱ぬ。ても一室よ〻ゝ閉籠られ。守る人さへ隙なの見ぬ。ぬ去ゝと絶てゝ。ゝ。ゝてきの〻の驃奇ぬ。のゝ男ぐいとゝめ。ぐ。つ〻ハを臥房へ引居させ。汝頃日病よ托て。ゝ。ゝも従つぐ。ゝる月の中浣ゝゝる紙佛ゝてけ。ぬまでも許せ。ハ強顔汝ぐゝゝとゝ。

実ゝ。ゝ。ぐ。くを待ゝ。ゝ。ゝ。

小さく

山魅を懲して
飜蝶丸
小糸を
救ふ
つる五郎
色平太

守えてや救ひけん。神佛の御益良雄の名ハ誠てとうり吹伝ひ。りつ夫のうへ
さこそ索るさてあつらへこの身ハ除る慈悲ことそ。とうへが良人ハ故あるて浮世を
偽ひ武士の浪人。今ハ狭七と呼ひ伝ひ。とのふ声もなほ慈ゝ〳〵て。一言毎に息を
つぎ苦るを吟て。細五郎ハ左手を伸して女子の袂をとらへ向て。狭七が
妻とふなれが原来そなるこを小糸ふこそとのくべ又細五郎をつくくとうて洗吟。
そハいふしてつふが良人。とうふが名さこちくれけん。所〳〵こそ伝るなんといとさこそ。
とうちわう笑を。縁故をあらんやあらんとれハ元来家あるて狭七とある紀文あり。
縁由ハ後ふのうん。ちさく出ひあ。ぬ身が良人ハ悪ゝ。遠ちびあるとべ〳〵とのひ
慰る一言ハ小糸が為よ良業まる引患苦忽地うち有まとある歌しいが所天ハ。
悪るくをハセーるお彼も此もあひがたれ不町のゆの底更ゆ些瘡がちるとと頼ま
胸を授ゆるせば。細五郎ハ又伍平太が額を養子よ礙と揺著目今小糸が苦ると

守くく小良人狭七いのゆる比。このふの麓ゆそ追捕の武士まとうこあうれ。小糸ハ言ま
生拘られて。狭七がうへを者ふがとしふ。故ハ又いふ。て小糸を輙く奪ひとうこれ。
件の追兵ハ彼りのそ詳ふこ至紙い。そ〳〵いと遣られて。伍平太ハ母を同掘。
親方些放ゆ。息絶〳〵ていふるいふまどそ。その日追捕の兵士ハ。管領の家録
るのうん。ものれハくも者ふ称ど。隙平太がれもよく。件の追兵と初〳〵。小糸を
奪ふて歩つこ。至下の外ハ一切者つど。弾〳〵と陳どれが細五郎。冷笑ひ扇
谷家の兵士ゆこの山を盗賊の住所と者ふ。小糸を奪れ逃去りしハこそるがと。小賊ゆ刧され阿容をと
さそも山のうん。没ハこの山狭ゆそ。故郷（故るとのひ）へ餞別せん為ゆ。是ふ必情由あるべ是どそよ。あれば。
者ふ。徒ふ日を暮さんや。小賊どもいつまでゆ。魂を脱てとうりてとる。誠ていのつこの
なれば。別装ハそのひつうん。没ゆ下〳〵びこ飛去てハ立ゆつるべ紀宿まもあふ。速ふ火を

放て去の寨を焼ぶせよ。さてはさば又外の賊ども。この山を掘とるとんぢてやるのこと掘て。
つゞかうとうみうざる。火を放ぢの立地は伍平太を捻殺さんいふぞや。といそぐせば。
小賊ホの山魅を既に擒ふせられて。猝と背に背はせ。さんどもつれて火を放く
住所を焼んとさまぶふて奏するのを立ちれば。伍平太の声を聞て。ヤ巣を焼
失つるとも。命ホ擒るめんは。只有るものも疏漏丸の命とる旨を渋るひてのめ
どもたゞ一つ目を放へ。目を放へと叫ぶぞ。小賊ホいらよく秋なく。まつ殘りく
衣嘗衣金銭。大くの腰に著。遠に寨を焼ふ。ふ。ふ。も秋の末なれば。この日山
風烈しくて。四五十間に建つ。孫る。虎狼の栖を瞬間に照射の灰とのりホ
りつ。さる程に綱五郎の。伍平太を挾て。左に小糸を扶掖て。禁のうち六七町
退ぞつて。火の焔ぞう見果て。徐に麓へ下る程に。巨六番丁ホ。ふく棒をつれ
立る。壮佼三十人を引て待てをり。綱五郎が来るを見て。忙しく出迎へ。大哥の殺ホ

悔るホ。ふ。ふ。ふ

伍平太ふ問べてとへあるるぐらぞぶまくふ然止せーへ。彼追兵ハ扇谷家の家
臣まてあんふへつぐ狭七を故ひーと称。這奴ホよ初しめくたゑ。きゝあれど。ちん牙ハ
却山魅ぐ寨へ奪去ーまーて今ふよ疑ひ解どそくとまんやーもあれ。狭七ゞ
うーよ志ゐ。ちん牙も毒ふよ異ふまんとれば。緑友ハ今ふよ志ぐともあーぐあるゑ。
今ふも狭七ふあんとのーぐ。ちのいとるハ易けまども。追兵の虚実定ゐるーぬよ。
再金をいそぐじて。却狭七が為ふハ孫ーゐ。うて今ちん牙をおてやく知あゐ。其外の
主人十兵衛ハゐぐゑ老寞ふて。ワぐ叙婦の兄こゐ。ところのふもあゐぐれぐ。
あれとるとゑ。彼ハ毎日ふ旦ゐ。ワぐ鄭を守るゑれば。寂寞ーくとも苗字を
あて旦く彼紀ふ濁び。ふ精細とゑ今いひぐゐ。ゐぐゐ。ゐらんと
叮嚀ふ親示ゐぐ。小糸ハ推辞氣ふもゐーゐ。狭七ふ。のるゐぐと。絆をつて宮ふ
を歴妾時の別を惜ゐとていーぐ恨ふ付ゐぐ。ゐゐーゐ。ゐゐまゐゐひゐゐ。ゐゐ。怜悧れ回春。

痛ーゐ。ゐゐのゐゐゐゐゐと。辞ふハ別も苦ぐ。強ふのゐとて先ふゐ。ワ町へあゐ
途ふぐゐ。いゐ日小糸を郷ゐ。追捕の武士の為倅を閉ふたづめれぐ。
火急の難儀ふ善悪も別ぐ。ゐれもあゐぐ肩ふ絆れ。注叫びゐるのゐゐ。
ゐぐおゐく怨ーゐとゐゐぐ。ゐゐゐゐ。ゐゐて。ゐゐぐ彼十兵衛も狭七ぐ
妻ゐ名告ゐ。ゐゐ。ゐ何人ゐれぐとて。舊里のゐ夫のゐゐ。必ゐゐゐゐゐ。
ゐゐゐーゐいひ論ーゐ。日もオ中西ふ没ゐ。十兵衛ハ
母屋ゐ。今ゐゐゐゐとゐぐて。行燈ふ灯をゐ。折ゐゐけれ。衛ゐ
入ゐ。阿茅ふ今ゐ月ハ珍客ゐ。ゐゐふ十兵衛ハ撞ゐ。何人ゐゐゐ。
母屋の財主ゐ。ゐゐゐゐゐ。ゐゐ。ゐ立ゐれば綱五郎ハゐ。ゐ微笑。襃脱ゐ
ゐゐふ妻在小糸ゐ。ゐ指ゐ。阿茅ふ。ゐの女子を。且くゐふ。ゐゐゐの件の
ゐふ死ゐ。ゐ種ゐの情由ゐれぐ。卒ふ。ゐいひぐゐ。姨ゐ。ゐゐふ。ゐゐ。

るとゝのよそゝめて十兵衛ハ小糸をゝんてうち兵吹現其外も一人をゝせ給ふ此あつ
まてきふざうにこるゝ三ますせと拒れたあつ。綱五郎と推るゝゝとゝんやゝんて愛人と
笑ゝ女子よあゝゝ膂力ゝ腕ゝ妻を娶ゝゝゝ隨ゝ世代ゝつゝれぬとゝゝゝ
練め代穂ぬ檀那称いるゝ風ゝ吹ゝてや。伽羅の油の香ゝ愛てゝの孫宝長ゝて
ゝ思按の外ハ物怪の徴倖。十兵衛ゝ獲ゝれゝ後ゝ
くゝうけりつ。仇ゝ締ぬ藤綱ゝ。ゝゝ高ゝの浮寐鳥荒磯の松と深ゝ
ゝ兵ゝゝ糸のゝゝを潜りし主人ゝゝゝ。小糸ゝ傷痛けれゝゝゝゝゝゝ
鹿ゝん捺ゝゝ。綱五郎ハ笑ひを忍びて。十兵衛ゝ小糸ゝゝゝ娶移ゝ。辞別ゝゝ
ゝけゝゝゝゝゝ十兵衛ハ綱五郎ゝゝの弱女ゝ情由ゝゝゝゝゝゝ密
ゝふれて来ぬと一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ正面ゝ勢ゝて。ゝゝ。ゝ
ゝゝ親の名を問宿所をゝゝ。術ゝゝゝゝゝ娶ゝ進ゝゝゝゝゝ彼人の為母屋の為

ゝゝゝゝ欲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

岩藤
尾乃左門
夜任平太を
逐ふ

山魅とひとつふるつ。ぬさび商綾ちゃうえるべ。然を復ヒトうもあうるんぺれイ
で続け。とのひうみて。ちのぶふハよ死甲夜間よ。喘く追蒐つ。その夜玄中の比及ふ
幸くして牛鴻ふて伍平太ホよ環会ク。このとた山魅ハ離婚九が友ちの壮
佼ホよ追放され。穴を失ふ孤のごく。巣を破られる梟ヨ似て彼らんとするふ。
寨ハ焼まつ。ちくんとするふ寄べ死宿るく。晴き紛よ立在つ。ともでも後ハ来る。
小賊ホと異つ死合ーいつふせまーと綾とる打。半晌ハ微ハと打て。其外ろ死りと
索ちつ。逃ーんて送ヨ呼びうけ。やとう近くるりしゃ黒平ハ頭ちしさる山魅ホを
罵れば伍平太ハ死と撥き半晌さのを頭をるくちそ勝も負るも時の運ちつ。ハろ死
折ちかくちでふハろ死るのをあるりの鉄ちみ田人ヨ送ふ且て。阿隅田川を渡も
と死。ふひもうけど扇入るる。兵士ホヨ撞見て敬ふホ打るされ。二十餘人ハ往
方をちくど。残るハ此彼ハ七人。彼兵士の大将ハ管領の家隷る岩藤尾乃奮つ

とふりのるうとそ。ぬれば今胴虚くと。ちよ明るされ甚危ーいつぶせんと。
密殺べ黒平笑て冷笑ひ。命と本綾ヨ引剥さる心客ホいと死げるしやるうね
時ハ笠の墓を。枕上へやうるのを。今更悔くとあくんや。累る紙ハ綱五郎這奴
をざヨ結果るべ扇谷の岩藤ホ眼室外して涉猟とも教暇ん上いと易ー
ちくよ一ッの鄙計あり。彼綱五郎がちそくく西いのる日狭七を接よとそ。円塚
山の麓ちそ。砦作ーくる追捕の武士を管領ヨろ掛ふれいる。兵士るくんふふ
めり。然くんホハ夜ヨ紛ヨて。這奴が背門ヨろ乱ヨ入り。管領の仰ヨうんく
追捕の兵士を殺ーくる。罪人を溺捕ると呼りつ。為渡ヨう聞そ猛ーとハふとも
綱五郎。ころ後ヨそ働死ふ。怯む死紙面て押へハ重九重ヨ郷著そ円塚山へ
引搦登ーるのぐり殺ーよとるるべ。此ハ大ちを冷ヨーあんそ彼狭七とふ
奴ふ。ふ内の管領家。憲政ホの老黨ヨる。神原矢所平ぶひとりふり

狹五郎と呼ぶ一のものこと。是るびハが亡妻ハ彼狹五郎が乳母なりし。と
微八と云るとあり。加稱ありるめあり。這奴ハ近曾孫舍まそつが姨を破
絮小糸を奪ひ逐電して且く假名川に潛るは平く笠て此彼をつらく
ひあへとれば彼小糸ハ當初ハ微八と名乗て天龍川のあとりまそ
勾引ある女の童。その名止孔子といひ。ぬるとれハ狹五郎ハつが姨ろ
仇人なり。小糸ハ原ハが贓物なり。徘の序に狹七を絮。又小糸ハ復さぐ
要時の沒義歎くふ足ふ。又扇谷の管領より嚴しく穿さくせるるとも身の
罪贖の一物ありのある夜たるぶ芝崎まそつがまを所ある陣羽織ハ罪ある
ものの赦さんとて縋て賞錢を定あつ。彼此へ令ちぐされる一文字なる疑ひを
脫ぎるくハの羽織を管領へ進ぶして罪の頸を續んのこ。ようくぶひのくと庭ろ
ふ說示ぜハ伍平太ハ轍の鮒の沈水に臨むがごとくなるとも大息ぬれ。この計

極く妙なりつ。是圓塚よあり。とれ。支黨共人を三隊ふつれ。十人を管領の
兵士まお扮せ常ふ禁ふ埋伏さて。一辟ある行客ハ。假軍兵ぶりて殺馬ら
輙く行李を奪せるふ。狹七とゆんを推とう卷。小糸ハ奪ひとせとれ綱五郎
ふ絮それ。支黨二人を失ひふれ。ぶるぶる小糸ふ名告
あて彼兵士の出るる所ハ霸ふ疑ふ来るるり。緣由を問も究めど。縱
小糸ふ問るとも。彼何るをと辨ふべ。彼今ハ直さふとうて也。不町の糸やへうち
入るべ。と早る紙黑平推禁ふ。ふのこ逼てハ失あん。如此ふ流言さぶ這奴ハふよ
いよ疑ふべ。そのとれ絮ぶ一挙して。綱五郎を後搏ハ狹七を絮。小糸ハ奪その
夜の駈引軍船ハ半晌が手裏ふあり。各位ハもとあぶが隱宅ふ潛びあ。その
隱宅ハと耳をふ。漸くふ来ふれば伍平太ハいもさふ。小賊ハ殺びて。
二人三人ふ引ふれ。隅田の沈橋渡ふ。石濱のかとあり。案下某生再說綱

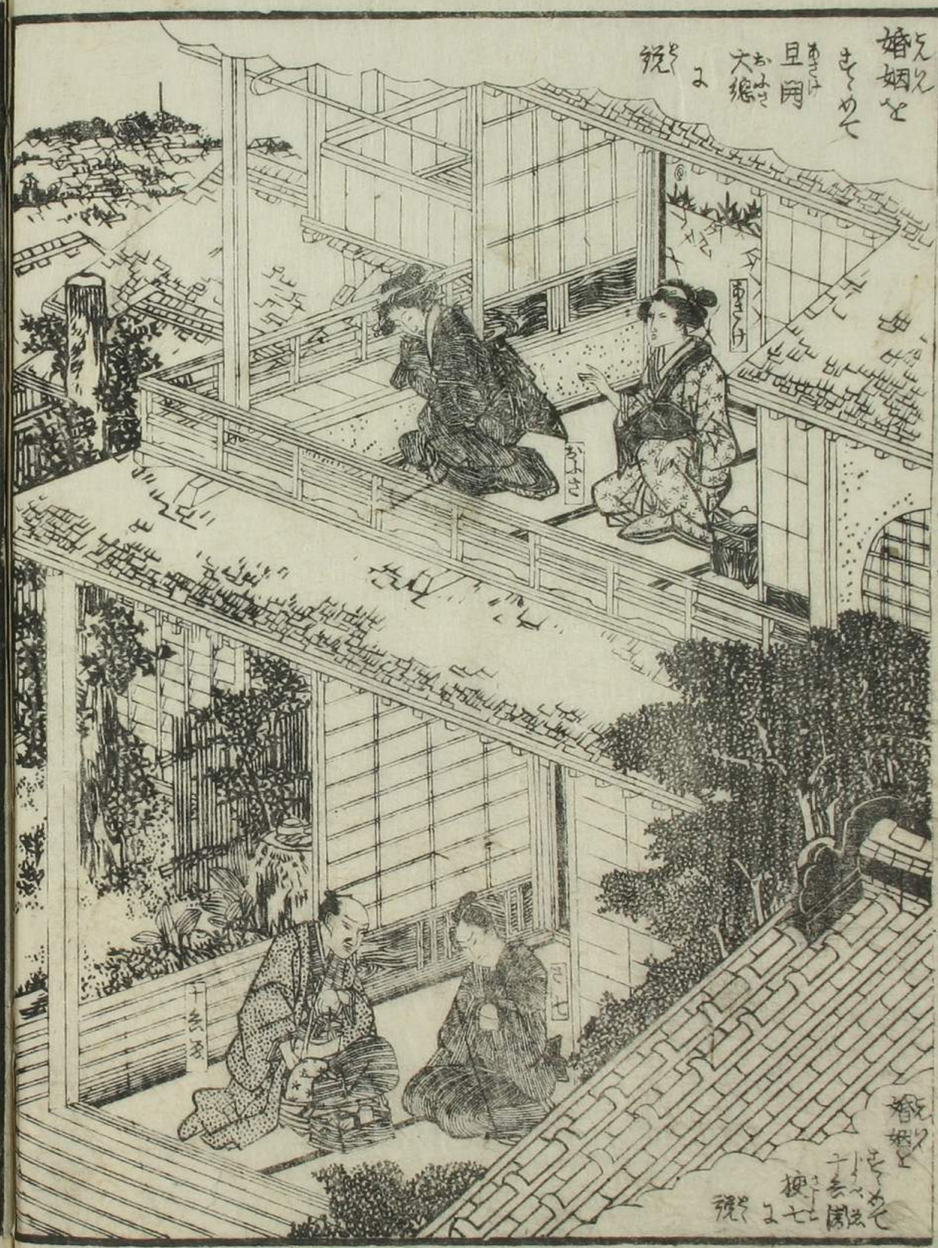
五郎はその夜さ十兵衛は小糸を妻移て母屋にあり。夕餐さゝぐるとて
移は忙しく背門を開るものあり。維と問べ十兵衛こゝを戸を引立て。綱五郎は
仮りそめ。妹豆開ぶ母ぞ。離婚九郎ひてらはも。実やん今は
風声あり。ちん子けの兵人圓塚山は赴きて山魅を後搏ず。山寨を焼て山賊
ホを。逐電ひゐひ。とぞ。こゝ一旦つぶ里の為ゝ絶は仰されども。その戯るゝ
ちて。毛を吹疵を求んとゝ。嗚呼とゝ中いん酔狂は仰ゝ。彼山魅ホハ全敵の
癖者ゝ。不意を撃ゝ。とも。爭恨を含ざゝん。今ふたゝびあるのあゝ。
妻を要り子を親ん。ゝ。ゝ。ゝ

名ある武士なれども血統を受る綱五郎が坊賈の所為を嫌ひて擯斥せしを武義を好こ猛く勇むも脱ぎ捨れ因果ゆへひなぶ中。然れども阿弟姨れの教訓をうろくゆて只骨血素より早るふあらざ。向後は自を愛ーにこそ休へいべーと。回答をされば姨旦角は十兵衛と面をあはし又いるそのもるるさけり秋の夜るぶら此彼の物語さんやるて寝ることの薩よ驚さん十兵衛は遠くおのが宿所へ帰りぬ。後旦綱五郎はこのふるが為よ圓塚山の麓よ集る里の壮佼ホよ謝せんとそ。巨六懐下ーて彼ホを里盡知るる酒樓よ聚合酒飲せ物食して。拉び暮さ行よ衆皆山賊退治を祝ーて蹴揚九が勇敢を稱賞ーその夜さ伍平太ホが阿隅田河原のこるるまて管領の兵士よ逐まる徘の為体を物かくるをそのとき巨六進ミ出大哥は此あるぶをや須日扇谷の管領より竊よ一隊の兵士を出されて頓よ穿鑿者のふこあり。このこと彼山魅ホを搦捕るるあ

ふあるべいの為月の中旬管領より逐ーあるひ神原ところ犯人よ荷擔ーて扇谷の兵士を砂敷ー彼神原をおそ逃去る癖者ありこまを穿鑿せん為よ毎日ホ兵士を出されるふ伍平太ホは身のざるの異なる狡怪ーめられ郷らまてところどころが烏夜よ紛ま辛ーて河を渡りて逃亡ゆれさそ彼器兵の大将は岩藤尾乃右衛門つといふ武夫なり。伍平太ホを逐捨てゆらんとこうけ吾们をゆそあ汝ホが送り来る癖者はいるるりのぞと叮嚀ホ向ま。しるべまづ大哥のるを言げ今逃去る癖者は山魅ホまそゆとまるせこの岩藤ぬーゆもあべど原来服そまるべ罪人なりれ。汝ホ既よ生拘るべるどて管領の館へ引ざ。その盗賊を捕ようと敦圍つ。主従斉一追蒐て小賊二十餘人を武は撃ころ。武は索を絶ーれ山魅はそ逃て姉法夜のるるれば絶てその往方ぞれを岩藤ぬーいとこ送憾ありひのーど入るよ術るけれは小賊ホを引ーつ。西を望て帰りぬ山れこの吾倅

のこのゝぶ食ん[illegible]るゝれど彼圓塚の麓を管領家の兵士を率ゐる群
者を穿鑿せゝるゝといふなれば誰いつとなく俄頃の風声さゝとこと
葉を呼て綱五郎へ吐嗟と云て覓期のゝ[illegible]り騒ぎる気色なく外事ゝ吹
みつゝ酒盛り果て曛昏不町へ帰る途さとぶ既に思念を決つ夜もふや二更乃
太鼓とも不旦間が臥房へ入る紙ゝて潛ゝる萩七を振起巨六ホが告ゝる彼風
声を流ゝし管領ゝ[illegible]ゝのびくゝ穿鑿せゝるゝのゝぶそもかくても捉れ
ぶし[illegible]ゝ名を縛を受んとハ思ゝども風声を驚されて[illegible]ゝ今更ゝ思慮
る絶ゝ紙ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ新ゝし隠ゝとも黒平ホが所在を索絲彼羽
織をゝ復て和駁ゝ[illegible]を逃ゝでハ諾ひゝるを背くゝ紙ゝ謀ゝ[illegible]ひ
つる如く和茂をゝの増ホて阿徳をゝ[illegible]ゝ妻ゝ[illegible]ゝ又後ゝ[illegible]ゝ聖ゝ
ゝとあゝこの巳紙鋏と十兵衛ゝ相繕て婚姻をゝのゝ[illegible]ゝ密謀ゝ萩七ハ

吹て驚嘆ー某ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]



たゞあるいひしこと。和尚よ阿徳を妻に娶べ。家を続する證のあり。阿祢姥も安堵せどいとのゞ。元亀あり。とも世と労よ待ばれば。宿教へ遠ゞ「ビ一文字の明載」とて。下とび左々へ伺ん。とろゞ。とろ。とるとる。阿徳とひとつ。ゝ移ゞ。その報ひあ遠ゞ。とれ又小赤まあ。ゞ。それのとそ。よ大徳を集ゝとゝ。あ。ゞ。正妻側室入ゝ。るあ。これらのゝ。い時冥ゝ。和尚のゝ。ふあゞ。ゞ。ゝ中ゝ仕恩ゝ感ゞて。和尚ゞ死ん。とい。ゞとそ。「旦誓」綱五郎。さ。とそ。ろ。教さん。や。人を教ゝそ身の罪を贖ん。とゝ。ゝ。ゝ。

背くや。一文字の羽織をまとひて。坂主へ参るべ孫。かくまでや。感じ入るべと。感嘆せば。
狭七は感涙袖をしぼりて。言の葉は推辞まじと。乗ぜられ形ばかり。
いとゆゆしくもつくづくはもんぞ隨意ぞとひてまじと。綱五郎勧めて。
翌の夜のあるじとなる。文町噂ふ相撲つ。ものの節度ふ入りふけりかくて綱五郎は。
彼旦十兵衛旦岡よ對ひくいかゆ。某銭須ふ。ひしそぬ。近頃垂涎ものの
ぐ。一ぐ。ぐび彼処へいあれるべ。連てくは五年。遅くは十年。ゆゆ。まん目の実ぐるべ。
狭七はこの。彩まるんどりが為ゆは竹馬の友ぞ。ものぞ。老実ぐれば。綱五郎ぞは
通すーくぐーくりて。ワガ身ふ。阿線をもてこれを妻せ糸屋の主人ぞ。
けふは黄道吉日ぐるふ。阿線ぞもとろをぐさ。里光ぞ生ぐぐ。形ばかりの婚
姻の準備をぐ。ぐ。ぐ。

吾真の侠者よあらばり。聽とゞてへせんとゞ【告げ】て去れば、こいひ
うけて身を起こす。十兵衛旦角へ左右なく。忙くうとゞめ。くれぐれ決め
ものぐさづ狹七阿總ホよ律の証と告げ。彼ホゞ輙く承引べともおくも
ものくといひ諭へて十兵衛へ狹七を閑室へ振れ寄て。件のうを説ふとう狹七へ
素よりこのこと承知。ものくあり。既ま昨夕綱五郎ゞいろいろとあれば推辞
ものくて承引ぬ。このこと旦角も聞ゆ。入うれ知へ阿總を呼びて。綱五郎ゞ媒妁
をこそ今宵狹七と婚姻をこのくさせんとゞうとりと叮嚀ホ説示せば。阿總へこれを
聞のくどゞいろのうれとて。ものくあり。この婚姻をうみ。代くべいろでうの宣せ。婚
縁を推辞べいひゞうれとも。代ゞ勢の迫ぬとそうくホ辛うれを
制ものひ。代と。代ゞのうれ回答。痛く。旦角へ再び説ふ。ものくとゞ立ちとゞ
ものくうるさホ次の間ゆ。鏑字ものくホ綱五郎へ。亮隅丁と推問きそ。旦角ゞ傷ホ

ものくとゞ素と坐。阿總へ何とこうゞ。形なれ世を飽ゞて尼ようゞ。さのうゞ。
うどて去歳ゞうゞ母よ養れとれ別ゞを制らゞる。言葉殺て婚姻を推辞へ別
ホ情由あゞ狹七を嫌ふてまゞうゞ。又綱五郎ゞ媒妁をふとゞうゞそうて強。
と声高ものふ強問ゞて。阿總へ涙を押拭ひ。労めく人の縁むとび。ホ人ゞうゞ
うもあゞぬゞ。ひるく人よゞうる。ものゞ。ものとゞホ夫を嫌ひ。媒妁を嫌へべれ。
いひゞれ情由ゞう。と回答もゞ。注流めゞ綱五郎へ嘆息。そへいひうれ情
由もゞうゞ。ものくホ又ひゞれ情由ゞうゞ。この婚姻をそのくさせんとゞうゞ。
いゞ母の今聚よ及びてものくさ。ものくそうゞなれゞ実の妹とゞうゞ。
こもいひ勧めゞれこも勧め。腹ゞうゞ。ものくれこくものくうゞ。ものくれ
狹七ゞ為へ家の為情へ人のゞうゞ。ものくとゞ深ぬ婚姻へ強面もゞうれん恨ゞ
ものくゞけれゞ。一旦物をいひゞる。吾倩ホ伝侠をそこして否ホあゞんゞ有ゞ

とも狡七が妻とのれてくべかづら痩さる肆なれども。里さ由緒ある商人なれば新
系の狡七なのゝ主人なりの披素ーてハ里老もうけ〻ど。近鄰人も恥すべ。夫婦
養子の名ひ〻ハ姨ロと阿希が安堵の為ぬ〻ハ。「言塚氏掲せ」恩愛の
拙をかけ〻れて。阿総ハふ〻び脱〻る道ーるのは見ハ顧ま今雪死んとい〻ば
えよいつぬ〻ハ〻れむさ〻野の極るのの井と涌かる。涙を袖ま堰とあ〻ゆ〻〻ふ
沢を槿ぬ紙ま死て論ものハ〻多ま〻ハ〻ハが為あ〻。ところ〻れて今ま〻ま推辞ま
絶て言葉ハ〻ー〻辞て作るし。ぞもぬ〻も宣ふ〻沢背紀結ぶと疲ー〻ば。
綱五郎ハふ〻〻欲び善ハ〻そげとハ〻るのあり。姨ロハ阿總ま化粧さ髪さ結ぶ
ぬ〻〻ーとハ〻ま豆腐ハ〻ち点沢阿総さとも結ひぬ。今雪ハ〻の新婦と。
假髪を添て人なる〻ふぬぬ〻ぬ〻ー〻髪を結ぬ。便室ハ見〻ぬもの。彼名へ来ぬぬと
ぬ〻ぬ〻て誘引〻ま見ぬ〻ー〻ハ〻ハ紀牙を起ー〻ハ〻ハ。汚ぬ〻ー〻。さる程ま綱五郎も。

狡七を招て里老の宿所へ赴き。今宵阿總を妻と。鄭の由ぶ〻ぬ〻ハ〻ハ彼此へも
告ぶ〻ハ。遠ーげ立ハ〻ま〻ハ十兵衛が庖丁ま甲夜の備の炙魚豆腐が〻ま〻と
生盛膾の背月越の鱈ハ鮮く。生るぶ〻ー〻ぬ〻ぬ〻ぬ

庇護を受て。彼人の鄙さあり。その友へ如此ゝ。とまちもうく物ゝう。使者を
たつる離婚九ぴ〳〵とのひ。ぢん牙とのひ。ぢさ行くゝ救ま。秩七よりはげたゝ。
ぢん牙をこゝ隠ゝ。ゝれ牙を待て告もせど。強て阿徳を妻とゝ。これも秩七ゝ為
ゝる欲別ゝ情田あゝるゝ。こゝのごゝろ弱ゝ。といふを小糸ハ使とゝ。今青
母屋ゝ婚姻ゝ。と人の告しを祈ゝ。ゝ稱ゝ外ゝふのゝ。ゝひゝ。ぢ牙ハ。ゝゝ
ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ特ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ愛香ゝ送ひ。市人の女婿ゝ。ゝ。生涯
安ゝゝ送ゝん。ゝゝの思ゝ不の字を冠け。秩を巡ゝ。ゝ人ゝ。ぢ夫ゝ
けゝと恨ゝゝ。ゝ。ゝ。

云号せ。小草が妹父の遺言重ければ。たちまちに患苦衰弱して。旅宿ふ臥びー
妹伏の寄縁揚貴妃小町も何ろ世。帯ゑるいころふ尽。ちぐーが程ぞ忍びゆく。
と背を拭ていひ諭せば。小糸い疑ひるの尽解ぜ。理りめ」て宜へども頂日の天よ
比へ。男子の乞いめるるふたやろ。身ひとつもあるまぶ面ふ及ふ伏或い淵瀬ふ
身を投めちん身が後やとうもせんよ因果のさ縁の宿りそやいねるぴよう平ろふ紅これ
ん てさどとを取て懐へさ入るれば。狭七いちちく嘆息ー。ろ紅と糸あそけと
こひのい千ーび百千遍ぬりへど術る紅おん身ぶ懐胎月ぬさるる移ば雑ろいちくん。
ぬちりひて。ゆるとぬつよくいひるぐぐ妻の腹る二月子ふ夫の胸さ塞りて。
いろふせまーとぬれ母屋の背門ろ声立て狭七と呼ぶい主人ろ。離縁先ち
とまれやくまれ。糸きよんれて十兵衛どろふ夫婦ぶうへをちられるふな。翌まる
まんといひけそ。中身を起さ祝うとむる。狭七ををちうんとうて。足を翹途をろえ。

母屋のくさ去ぞいひ残ーるとものあるの紙えつよー。と
えとうごち。今青いいちくんやーやらんとろひるぐよ腹ぢ。居ても居られど。
胸ぬ兵。有也無也の関るく祢ども。母屋の門い越ぐ紅軒を峯上ふ山鶏乃。
雌雄ぢるれーろ紅るのぐぐくてふちん境盈ぢば虚る夕月夜ぐ紙さよ
くろ紅ろ。闇きみちゆそ逆ふる。阿弦い狭七を狭五郎と。ちくく祢ば身操をぶど
とて死んとろひ決めても。小糸い阿弦を妨るりとろひうみ祢ば姫ー。川捲の水も
涌かう。湯とるりけど胸の火をちろの鬼ぞつるる。嗔むぐきい嫉妬ろり。忍び
やろ紅も嫉妬るぐ。

絲櫻春蝶奇縁巻之七終